

日本ハチ公めぐり



東京大学
農学生命科学研究科
広報室

①秋田県大館市



忠犬ハチ公は、牡の秋田犬で、大正12年11月、大館市大子内(おおしない)の斎藤義一宅で、父:大子内山号、母:胡麻号の間に生まれた。



<http://www33.tok2.com/home/m35rx4/DSC008925.jpg>

秋田犬ハチ

1923(大正12)年11月に秋田県大館市で生まれた。1924(大正13)年正月ごろ、秋田犬に思い入れのあった東京大学農学部の上野英三郎教授の下におくられ、渋谷の自宅でかわいがられた。

上野教授はハチが1歳の1925(大正14)年5月21日に急逝され、ハチは浅草に預けられた。故人が恋しかったのか、渋谷の旧宅に帰ってしまうこともあったという。その後、上野家と面識があった小林菊三郎氏がハチを引き取ったが、その後も渋谷駅へ通うことが度々あった。しかし、この頃はハチの評判は良かったとは言えず、首輪を盗まれたり、落書きをされたりと散々だったそうである。

この状況を哀れんだ日本犬保存会創設者、斎藤弘吉氏が新聞にハチの事情を投稿したところ、1932(昭和7)年10月4日の朝日新聞朝刊で取り上げられ、一躍有名犬となった。このころから「ハチ公」と呼ばれるようになり、また「忠犬」と冠されるようになった。

1934(昭和9)年秋ごろから持病のフィラリアのため弱ってきたハチは、1935(昭和10)年3月8日朝、渋谷駅を出て路上で死亡した。ハチ11歳であった。

渋谷駅で簡単な葬式が行われ、斎藤氏の意思で東京大学農学部獣医学教室で剖検され、内臓の一部は上野家の墓に埋葬された。また、死体は国立科学博物館に運ばれ、剥製として保存されることとなった。

同年6月15日から国立科学博物館で展示が始まり、これまでに多くの来館者に感動を与え続けている。

http://blogimg.goo.ne.jp/user_image/3d/ae/33ca332623ecc0d35c800e684b3e8dbb.jpg

②山形県鶴岡市



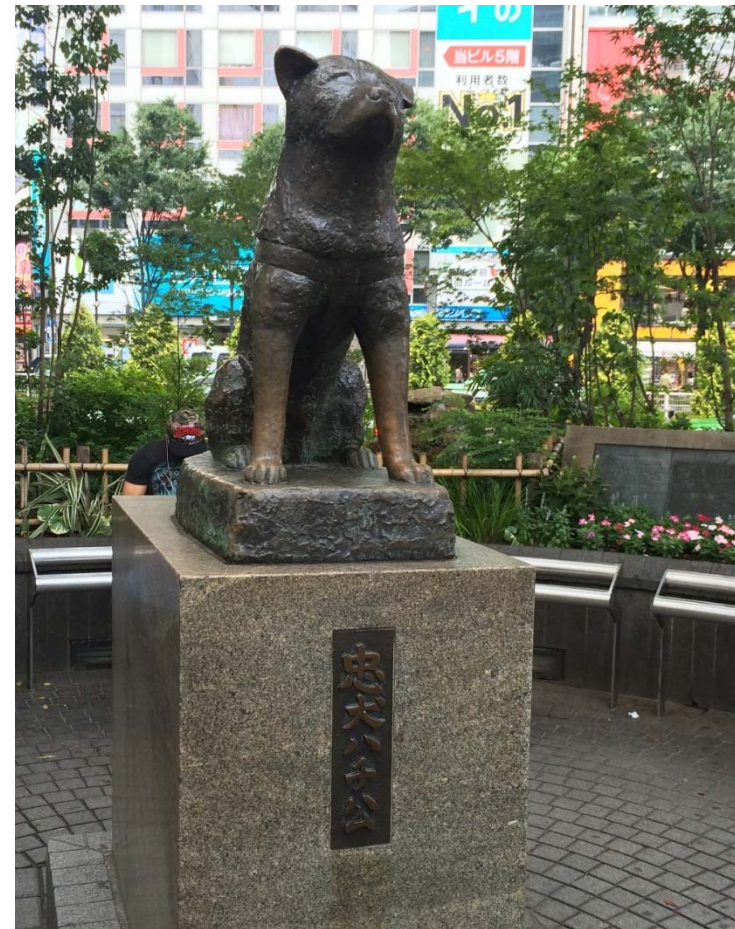
鶴岡出身の斎藤弘吉氏が、昭和7年10月4日付東京朝日新聞に、『いとしや老犬物語、今は世になき主人の帰りを待ちかねる7年間』という見出しで投稿した。



http://blog-imgs-73.fc2.com/t/a/k/takuan21a/150506_094505_1200.jpg

http://blogimg.goo.ne.jp/user_image/4f/b8/8681ea58ca68b29c433b0366c11ebc5c.jpg

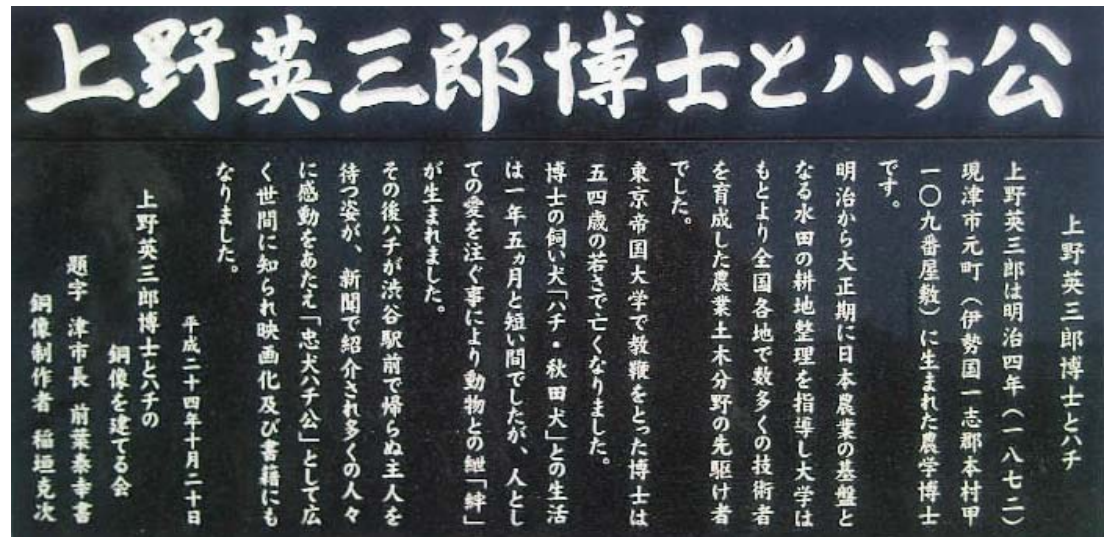
③東京都渋谷区



http://a.imgx.jp/img/user/photo/17/383/246/17383246_x.jpg

2012年10月20日除幕

④三重県津市



⑤ 東京大学農学部



うえの ひでさぶろう
上野英三郎博士とハチ公
(1872~1925) (1923~1935)

秋田犬のハチは大館市に生まれ、生後50日ほどで東京帝国大学農学部の上野英三郎博士（農業工学・農業土木学）に贈られた。犬好きだった博士はハチを大切に育て、大いに可愛がり、当時は駒場にあった農学部への通勤や渋谷駅からの出張にはいつも送り迎えをさせた。学生たちは教授の飼い犬を呼び捨てにすることをばっかり、「ハチ公」と呼んで敬意を表した。およそ1年半が過ぎた1925年5月21日、博士は大学構内で急死した。それからハチは死ぬまでのおよそ10年間、朝夕に渋谷駅に通い、博士の姿を探し求めた。生前、博士が長期出張から渋谷駅に戻った時、改札口でひとり待つハチに驚き、この像のように、互いにじゃれ合って喜んだという。

制作：植田努 2015年

Dr. Hidesaburo Ueno and Hachiko
(1872-1925) (1923-1935)

Hachi (Akita dog) born in Odate city, was presented 50 days after birth to a Professor in The University of Tokyo, Faculty of Agriculture, Dr. Hidesaburo Ueno (Agricultural Engineering, Irrigation, Drainage and Reclamation Engineering). Dr. Ueno loved dogs, and raised Hachi with great care and affection. He was always accompanied by Hachi when he commuted on foot to Komaba (where the Faculty of Agriculture was then located) or Shibuya station from where he went on official trips. Sadly, a year and a half later, on May 21, 1925, Dr. Ueno passed away suddenly in the campus. After this, until his death 10 years later, Hachi went to Shibuya station every morning and evening, and continued waiting at the ticket gate for Dr. Ueno's return. Prior to Dr. Ueno's death, the intelligent Hachi knew that Dr. Ueno returned home from Shibuya station after his long-term trips. Once when he reached the station, Dr. Ueno was surprised to see Hachi waiting to welcome him at the ticket gate. As seen in this statue they playfully rejoiced their meeting.

Produced by: Tsutomu Ueda (2015)

⑥福島県飯舘村



飯舘村と渋谷のつながり

今年6月10日東京・渋谷のシンボル「忠犬ハチ公」のオブジェが、全村避難が続く福島県飯舘村に寄贈されました。現在同村は東京電力福島第一原発事故で村全域が避難指示区域に指定されていますが、

**ハチ公が渋谷駅で飼い主の帰りを待ち続けたように、
村民の帰還をじっと待つという願いが込められています。**

オブジェは渋谷区内の渋谷公園通商店街振興組合が寄贈しました。鉄のワイヤ製で高さ約1メートル60センチ、幅約80センチあり、JR渋谷駅前のハチ公像の1.5倍の大きさがあります。

同組合は昨年春から被災地支援の一環として、特例で現在も72人のお年寄りが暮らす「いいたてホーム」（飯舘村伊丹沢）や村立小学校などに、商店街で育てた花のポットを寄贈。一方、村は児童が書いたメッセージカードを贈って商店街で飾ってもらうなどして、交流を深めてきました。

同ホームで行われた除幕式では、同組合の小松原一雄理事長（66）が「渋谷全体で福島を応援したい」とあいさつ。施設を運営する「いいたて福祉会」理事長の菅野典雄村長は「村民に『ハチ公が古里で待っている』という話をしたい。村民は絶対に戻って来る」と決意を語りました。

信頼と絆のハチ公物語が飯舘と渋谷の交流の象徴になり、そして飯舘村の再生につながればと沢山の人々の願いが込められた贈り物になりました。

